
Fate/bleusphere code

ねろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / b l e u s p h e r e c o d e

【Nコード】

N 4 4 6 8 Y

【作者名】

ねろ

【あらすじ】

「まあ初めてにしては上出来だったな」

その出会いは唐突だった。

ありふれた日常。ありふれた偶然。ありふれた不幸が重なり。少女は彼に出会う。

魔法少女。魔術師。英霊。魔女。あらゆる物を飲み込み杯は回りだす。

あらゆる願い。あらゆる尊厳。あらゆる理想。あらゆる絶望を巻き込み、少女達の世界は動き出す。

これはとある少女達と、とある英雄達の、奇跡と魔法と約束の物語。
「念の為確認しよう。君が私のマスターか？」
戦いは今、新たな舞台へ

ブログ：その日、運命に出会う（前書き）

初めまして。ねろ　です。

Fate・まどかマギカのクロスオーバーです。

正直に言います。人生初小説です。初投稿です。初クロスです。初めてつくしです。

文体がおかしいかもしれない。キャラ崩壊するかもしれない。設定間違えるかもしれない。途中で消えるかもしれない。何もかもが不安ですが、なにとぞ暖かい目で見守っていただけたら幸いです。

主役はさやか。

果たしてどうなることやら。

いくぞさやか。ネタの貯蔵は十分かあああああ！！！！

プロローグ：その日、運命に出会う

ガチャリと。

また一步ガチャリと。

金属音を響かせ男が迫る。

「あ……あ……」

なんで？

なんで？どうして？

どうしてこんなことになったの？

私はただ、忘れ物を取りに来ただけなのに。

偶然、友達から電話があつて

宿題のこと思い出して

夜の学校に忍び込んで

宿題を取りに来ただけなのに。

「それだけ……なのに……」

あんなものを目撃して

見つかつて

逃げて

逃げて

にげて

ニゲテ

こんなところ

屋上に追い詰められた。

「すまん、見られたからには生かしておく訳にはいかんのだよ」

ガチャリと男がまた一步迫る。

「い……あ……」

殺される。

きつと私は殺される。

あれは見えてはいけないものなんだ。

私はそれを見てしまったんだ。

私はきつと殺される。

目の前の男なら造作も無く

きつとまばたきをする間も無く

虫を仕留める様に

何の躊躇いも無く

きつと私は殺される。

「いや……だ」

いやだ

いやだ

嫌だ

イヤだ

そんなのはいやだ

大好きな友達がいて

あこがれた先輩がいて

救^{叶えられた}えるかもしれない彼^{ネガイ}があつた。

「それ…なのに」

それなのに

私はここで殺される。

『全く、こんなところで死にたいのか君は』

どこからか声が聞こえる。

「死にたく…ない」

死にたくない

「死にたくない」

死にたくないに決まってる。

『そうか、ならば私に続け、復唱しろ。そのような泣き言聞く耳もたん』

死にたいなんて、あるはずが無い。

『素に銀と鉄』

「素に銀と鉄」

死にたくない死にたくない死にたくない

『礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオーグ』

「礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオーグ」

目の前の男が止まる

『降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ』

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

こんなところで死ぬのは嫌だ

『閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつど五度。』

ただ満たされる刻を破却する

『閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつど五度。』

ただ満たされる刻を破却する」

視界に紅く、淡い光が差す。

何も判らないまま死ぬのは嫌だ。

『——セツト』

『——セツト』

理由も判らないまま死ぬのは嫌だ。

『告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

光は紅く、強く輝きを増す。

何もしないまま死ぬのは嫌だ。

『誓いは此処に。我は常世総ての善となる者。我は常世総ての悪を敷く者』

「誓いは此処に。我は常世総ての善となる者。我は常世総ての悪を敷く者」

光は更に紅く染まり、男と周りの影を濃厚にする。
願いを叶えられないまま死ぬのは嫌だ。

『汝三大の言霊を纏う七天』

「汝三大の言霊を纏う七天」

そうだ、こんなところで死ぬ訳にはいかない。

『抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ』――！』

『抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ』――！』

こんなところで、死んでたまるもんか！！

光が更に強くなる。

私の視界が真っ紅に染まる。もう目も開けていられない。

「ん……」

光がゆっくりと弱まっていき、目をあける。

「……あ」

光の中心、男と私の中間に、誰かが立っている。

「え……？」

弱まっていく光と同じ色、紅い服を着た白髪の男が、私を殺そうとした男と向かい合う形で立っている。

「初めてにしては上出来だった。まあ見たところ素質は平均よりだ
いぶ、いや、かなり下のようなが」

紅い服の男が背を向けたまま話しかけてくる。

「こちらに拒否権は無いにしても、またおかしな者に引き当てられたものだ。魔術師どころか、魔術回路があるのかどうかも怪しい。」

まあ契約はできたのだ。少なからず存在するのだろう」

唐突過ぎて目の前の男が何を言ってるのか理解できない。

「サーヴァント・アーチャー。選定の呼び声に従い参上した。念の
為確認しよう。君が私のマスターか？」

これが、

私、美樹さやかと、アーチャー錬鉄の英霊との出会いだった。

プロローグ：その日、運命に出会う（後書き）

初めまして。ねろ　です。大事なことなので前書きとあとがきで二回言いました。

はじめて小説を書いたわけですが。

一話書くのに8時間掛かりました。

手が震えるわ、変換おかしくなるわ、アーチャーのしゃべり方こんなでよかったのか、資料とにらつめこしながら悪戦苦闘しました。でもこれがすごく楽しくて、ぜんぜん苦痛に感じない8時間でした。感想。誤字。質問。ある程度は応えます。ガンガン送ってきてください。

ブログ 魔術師 瑚宮修一 上（前書き）

みなさんお久しぶりですねろ　です。

一ヶ月近く待たせてしまつて申し訳ありません。

なに？別に待つてない？

そんな事言つな。

寂しいだろうが。

自分でも、まさかこんなに掛かるとは思つてなかった訳で、週一で話考えてる週刊誌の漫画家の凄さを身に染みて味わいました。

こんなペースで、この小説完結するまでいったい何年掛かるんだろうか・・・

ブローグ 魔術師 瑚宮修一 上

電子音が鳴り響く。

「……………んあ」

毎度の事ながらこの音を考えた人間は人の眠りというものをよく理解していると思う。

この音は眠っている人間にはあまりにも不快だ。

「……………んん」

昨日は色々あつて遅くまで起きていたんだ。

もう少し寝ていたってバチは当たらないはずだ。

「……………ん」

しかし遅れてもうひとつの電子音が重なる。

不快と不快の二重演奏。

これはさすがに起きなければなるまい。

「……………んぐ…」

眠たい眼を擦りながらベッドから這い出る。

そして机の上で不快を鳴らし続ける目覚まし時計を止める。

午前6時半。

いつもど通りの時間だ。

のそのそと歩き出しカーテンを、そして窓を開けベランダに出る。

ひんやりとした空気ではんの少しだけ眠気が覚める。
とどめとばかりビル群の向こうから昇る朝日を浴びて眠気を吹き飛ばす。

「……………はあ」

まだ少し眠い。

手すりに寄り掛かり眼下の町並みを見下ろす。

新聞を配る配達員。

犬の散歩をする老人。

ジョギングに勤しむ中年。

「……………平和だ……」

いつもど通りの平和だ。

『明日崩れてしまうかもしれない』なんて心配が入り込む余地が無い位どうしようもない当たり前な平和。

「……………なのに」

あらためて左手の甲の印、『令呪』を見つめる。

「なのに何で、この町で聖杯戦争なんて起こるんだ？」

俺こと瑚宮修一は、これで何度目かわからない疑問を口にした。

朝の冷えた廊下を渡って台所へ行く。

家には今、俺一人しかいないので朝食は自分で準備するしかない。コーヒーを入れる準備と同時にトーストを電子レンジに入れる。

こういう時、同居人の一人でもいてくれたらなんて思う。

何せ中学生の一人暮らしだ。

天涯孤独というわけではないが誰か一人ぐらいいは誰か居て欲しいところだ。

母親は早くに亡くなってしまったし、親父はイギリスで講師。

そしたら俺以外には残る人間がいない。

親父について行くという手もあったが、霊脈の上に立つこの家を手放すのはなんとというか勿体無い。魔術師的に。

そう、

瑚宮家は魔術師の家系なのだ。

魔術とは、読んで字の如く魔を操る術。

イメージ的にはちちんぷいぷいとかアブラカタブラとかでも大体あつてゐる。

要は呪文を唱えて不思議なことをする人達の事だ。

とは言っても某有名な魔法使いの小説よろしく、箒で空を飛ぶとか杖から何か出す訳でもない。

基本的に魔術師は世に隠れ忍ぶ異端者だ。

目立つ事は禁止されている。

そんなことをしようもんならお偉いさん達に何をされるかわかったものではない。

第一、

『家は魔術師です』

何てご近所に言ってもにわかには信じてもらえないだろうし、証明したとしても奇異の目で見られるのは非を見るより明らかだ。最悪、怪しい宗教団体に見られそうです。

そんな訳で、魔術師と言うのは家の中だけの秘密なのである。

ピーツという電子音が鳴り響く。

トーストが焼きあがったようだ。

焼きあがった二枚のトーストを別々の皿に並べて、コーヒーを二人分入れる。

そう二人分である。

「まあ、同居人というかなんと言うか、一人は居るんだよな」

話を同居人に戻そう。

今この家には俺ともう一……

「あれは『一人』と呼ぶべきなのか？それとも『一…霊？』と呼ぶべきなのか？」

とにかくまあなんか居る。

そんな疑問を呟いていると何も無い空間からそいつが現れた。

「おはようセイバー、あれからなんか変わったことはあったか？」

「……………」

目の前に現われた大男は何も答えない。

と言うか昨日召喚してから一言も喋っていない。

「……はあ、お前なあ、頼むからなんか喋れ。出来ないならなんか反応してくれ。じゃないと聞こえてるのかどうか全然わからんだろ」

コクン、とセイバーが小さく頷く。

お、今のはわかったようだ。

意思の疎通は出来るらしい。

もしかしてコイツ、単に無口なだけ何じゃないか？

そう思って試しに念思、テレパシーのような物を送ってみる。

（おーい、聞こえてるかー）

（……………）

オイ、心の中でもだんまりですかこの野郎は。

「…はあ、何なんだよお前は」

なんというか先行き不安だ。

「こんなんで、聖杯戦争なんて戦い抜けんのか？」

改めて左手の令呪を見て愚痴をこぼしてしまう。

聖杯戦争。

言葉のとおりで言えば、『聖杯』を賭けた戦争である。

と言っても、その殆どは戦争なんて大きな戦いではない。

聖杯を巡って二つ以上の勢力が争えばそこに聖杯戦争と言う言葉が当てはまる。

極端な例を挙げると、聖杯と言うものがオークションに賭けられたとして、それを二人以上の人物が競り合えばそれはそれはもう立派な聖杯戦争と言うカテゴリーに当てはまる。

でも、俺が言う聖杯戦争はそんな小さな物じゃない。

殺し合いなのだ。

聖杯に選ばれた七人の魔術師達による、真正正銘の殺し合い。

令呪とは、その聖杯に選ばれた魔術師、マスターの証にしてサーヴァントに対する三回限りの絶対命令権。三回使い切るとマスターではいられなくなる。

サーヴァントとは、聖杯戦争においてマスターが召喚し、使役する英霊の事。

英霊とは、読んで字の如く英雄の霊。人類史において、偉業を成し遂げ、伝説、又は神格化された者達である。

幽霊とかそんなチンケなものとは違う。

どちらかと言うと精霊とかそういう類に近い。

彼らはその死後、魂を『英雄の丘』と言う処に保管され、人知れず世界を守護しているという。

召喚された英霊は、召喚の際に聖杯に用意された七つのクラスに別けられる。

剣士『セイバー』

弓兵『アーチャー』

槍兵『ランサー』

騎兵『ライダー』

凶戦士『バーサーカー』

暗殺者『アサシン』

魔術師『キャスター』

これら七騎を、選ばれた七人がそれぞれ一騎ずつ召喚し、最後の一人になるまで殺し合う。

これがこの町で起きようとしている聖杯戦争である。

「ま、そんな事言っても始まらない…か」

選ばれてしまった以上は勝ち残らなければいけない。
気を取り直して、今は目の前の現実を目を向けよう。

「とりあえずは、早いとこ支度して、学校に行かないとな。セイバー、お前の分も朝飯用意してるけど、食うか？」

「……………」

今度は首を軽く横に振って、そのまま消えてしまっ

「いないってか」

霊体化したのだろう。

英霊と言うのは霊であるが故に自由に霊体化したり実体化したり出来るのだ。

因みに言うと、英霊は魔力を元に動いてるのでマスターからの魔力供給があれば食事の必要は無い。

「んで、残ったのは、二人分の朝飯か…」

残された二人分の朝飯を見つめる。

早いとこ食べて学校に行こう。

「……………」

あれから、二人分に食事を済ませ、身支度をして、学校まで来た。そして、今校門の前で立ち止まっている。

「……魔力…か…」

僅かながら魔力を感じる。

気をつけていなければ見落としてしまいそうなほど薄いが、確かに感じる。

どういうことだ？

昨日まではこんなもん無かったぞ。

もしかして昨日の夜にここにマスターの誰かが来たのか？
だとしたら何のために？

「あら？瑚宮さん。おはようございます」

細工？いや、それとも召喚したのか？
出どころが判れば予想がつくんだが…

「あ、瑚宮君おはよう！」

何か細工してたら不味いな、学校の中で戦闘をするのは…

「瑚宮君？」

最悪、学校の人間に被害が…

「瑚宮！…！」

「ぬわ…！」

大声で呼ばれてハツとする。

「な…」

振り返るとそこには不思議そうにこちらを見つめる三人がいた。

「きゅ…急に大声で呼ばないでくれ。心臓は弱い訳じゃないが心臓に悪い。色々と。」

「ごめんなさい。でも、何だかものすごい顔だったもので…」

そう言つて穏やかに話しかけてくるのはウェーブのかかった髪の子。志筑仁美さん。

聞いたところによると、どこその良家のお嬢様らしい。

雰囲気からしていかにも『良家のお嬢様』って感じの子だ。

因みに、学園内でもかなりもてている。

男子の中でも古風にもラブレターを出したという話もちらほら聞か。いや、古風なのか？書いたこと無いからその辺は分からんが。しかし彼女はその全てを振っているらしい。

「なんかすごい眉間に皺寄せちゃってたけど、何かあったの？」

仁美さんに続いて心配そうに話しかけてくるのが鹿目まどか。

おさげともツインテールとも言える髪形とその容姿でなんか一回り子供っぽい。

いや、と言つより小動物っぽい。

「な」に言っちゃってんの仁美。謝る事無いって。こんなに可愛

らしい美少女三人をスルーしようとしたコイツが悪いんだから」

んで、自分で自分のことを美少女とか抜かしてるショートカット。さっきの大声の主がコイツ。

「…美樹さやか」

ひとを驚かせといてなんにも悪気がなさそうな顔してやがる。ちよつとムカつく。

「あ、ああ、えと…な」

周りを見ると数人が何事かとこちらを見ている。中には仁美さんに好意を抱いている男子もいる。

「いや…なんでもないよ。おはようお三方。今日も仲睦まじい様で。それじゃあ俺急ぐから」

三人を適当に誤魔化し、そそくさと校舎へと向かう。

「はあ…全くアイツは、ちつとは周りをよく見ろつての」

ああいう現場は変な勘違いをする奴がいそうだ。

なんせ学園のアイドル『志筑仁美』の前だ。

そついうのは変な勘違いは勘弁して欲しい。

せつせ上履きに履き替え、教室に向かう。

教室に入ると、なにやら人だかりが出来ていた。

「またか……」

人だかりの中心は昨日転校して来た暁美…なんだっけ？

まあ暁美さんがいる。

昨日転校して来たばかりだし、おまけに美人ときたもんだ。

質問攻めにあうのは当然だろうが、さすがに二日連続と言うのはきついでろうな。

聞かれてる本人もなんかめんどくさそうだし、ちよつと可哀想になる。

色々質問しまくっている人だかり達がそれに気付いていないみたいだし、どうにもならんな。これはまだ暫く続きそうだし。

「……………」

あ、今ちよつと目が合った。

「……………」

なんかするどい目つきでジッとにらみつけてくる。

俺なんか悪い事した？

「……………」

今日一日の授業が終わって、今は放課後。
グラウンドでは、運動部の連中がせっせと青春の汗を流している。

「…ふう」

誰もいない夕焼けに染まった廊下を見渡す。

「薄いな…」

学校内に魔力は未だに漂っている。
今日一日、ひととおり学園内を探ってみたが出所は未だに判らない。
これは学校全体に広まっていると考えるべきか。

「何かあることは間違いないと思うんだが…あ？」

その時、何かがふと視界に入る。

誰もいなくなつた廊下にポツンと人影が在る。

「……………」

女性が窓の外を見てポツンとそこにいた。
夕日に照らされて女性の金髪がすごく綺麗だ。

「……」

よくよく見ると学園の教師という訳でもない。
街中を歩くような格好で、どうみても部外者と言った感じだ。

「あ……あの……すみません……貴女ここで何を？」

その人がこっちを振り向く。

正面から見ると整った顔立ちがよく判る。
うわぁ凄い美人。

「あら、貴方……」

その人にまじまじと見つめられる。
なんだか今日は美人と目が合うことが多いな。

「……そう、貴方がそうなのね」

「え？」

一瞬何を言ってるのかよく判らない。
『貴方が？』何を言ってるんだ？

「あの……何の事ですか？俺に何か用ですか？」

何なんだこの人は？
俺の何を知っている？

「気にしないで。今日は顔を見に来ただけだから」

そのまま俺を通り過ぎ立ち去ろうとする。

そして、階段の入り口に差し掛かった処でこちらを振り向き。

「それじゃ、死なないように頑張ってね、『聖杯のマスター』さん」

「——ッ!」

その言葉で体が固まってしまふ。

その人はそのまま階段を下りていってしまった。

今確かに『聖杯のマスター』と言ったよな。

てことは聖杯戦争の関係者!?

「ちょ……ちょっと待って!」

慌てて追いかける。

が、階段を見ても、もういない。

「くそっ! 何処に!」

ともかく階段を降りて行っただ。てことは下だ。

急いで……階段を……下りて……

「いた！」

一階の廊下、下駄箱のほうに向かっている。

「おい！ちょっと待って！」

そう叫びながらもその人が下駄箱の影で見えなくなる。
下駄箱にたどり着いたときには、また消えていた。

「……あ」

今度はすぐに見つかった。

正面、校門の影でまた消えていった。

「くそっ！ セイバー！！追うぞ！！」

学校の魔力の事も気になるが、今は目の前のあの人だ。
たぶん何か知っている。

この『見滝原の聖杯戦争』の事を。

プロローグ 魔術師 瑚宮修一 上（後書き）

はい。と言うわけでオリキャラ視点のプロローグ上編終了でございます。

最初は、さやかかの召喚まで書く予定でしたが、それだとあんまり長くなりそうなんで上編下編に分けることにしました。

40000字の感覚がまだ分らないので、あと何字とかそういう機能あったらなあ。

最初は一週間ぐらいで書けると思ってたんですよ。

でも、

アレどうしようとか、

やべえアレ考えてねえとか、

あのキャラの扱いどうしようとか、

オリキャラの名前と設定どうしようとか、

これ、まどマギの設定的に大丈夫なのかとか、モバゲーで質問したりとか、

俺このまま行ったらまどマギファン、特にさやかファン全員敵に回すんじゃないだろうかとか、

マミ隊長とか、マミガメッシュとか、教えてマミ先生とか、

何か脱線しながらも仕事とか、運転中とか、コネクトとFate / zeroのOPとED聞きながら、この小説アニメ化したときのOPED妄想したりとか、いろいろ考えてたら、

気付いたら一ヶ月近く掛かっていた訳で御座います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4468y/>

Fate/bleusphere code

2011年12月13日02時52分発行